

大阪市立鯉江東小学校 平成28年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A:目標を上回って達成した	B:目標どおりに達成した
	C:取り組んだが目標を達成できなかった	D:ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【視点 学力の向上】 ① 本年度の大阪市小学校学力経年調査において、2極化傾向の改善を図る。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div> ② 理由づけをして意見を述べたり書いたりできる児童の割合を50%以上にする。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div> ③ 本年度末の本校の学校生活アンケート調査で、国語・算数の授業の内容が「わかる」と回答する児童を昨年度より増加させる。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div> ④ 本年度末の本校の保護者アンケート調査で「学力を定着させるような授業が行われている」と回答する保護者の割合を昨年度より向上させる。 <div style="text-align: right;">(マネジメント改革関連)</div> ⑤ 大阪市小学校学力経年調査で、「読むこと」「書くこと」領域の平均正答率で全学年大阪市平均を上回る。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【習熟度別少人数授業の充実】 習熟度別少人数授業などの学習形態を工夫して、基礎・基本の定着を図る。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div>	A
指標 <ul style="list-style-type: none"> ○ 習熟度別少人数授業を年間計画にそって実施する。 ○ 「習熟度別少人数授業など個に応じた指導の充実にかかる事業」状況調査(後期分) <ul style="list-style-type: none"> ・ 単元テストの正答率の分布の2極化傾向を前年度より減少させる。 ・ 意識調査で国語・算数の授業が「分かる」と答える児童を前期より増やす。 	
取組内容②【言語力や論理的思考力の育成】 国語科を中心にして、言語活動の充実を図る。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div>	B
指標 <ul style="list-style-type: none"> ○ 国語科において、発展的な力を伸ばすための取り組みを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料を読み比べ活用したり、文章を読み比べて意見を述べたり書いたりする授業(取り組み)を各学期1回以上行う。 ○ 物語文の読み取り部分の正答率50%未満の児童の割合を、前期より減らす。 ○ ワークシートやノートに次のような記述内容が書ける児童を半数以上にする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習のめあてをとらえた意見。 ・ 理由づけをして書いている意見。 	
取組内容③【特別支援教育の充実】 学級担任と特別支援学級担任が連携して「個別の支援計画」を策定するとともに、指導を通して「個別の指導計画」を児童一人一人の実態に合うように更新する。 <div style="text-align: right;">(カリキュラム改革関連)</div>	B
指標 「個別の指導計画」を年2回見直す。	

取組内容④【 授業研究を伴う校内研修の充実 】 全学年で授業研究を実施し、指導力の向上に取り組む。 (カリキュラム改革関連) (マネジメント改革関連)	A
指標 年間19回以上実施する。	
取組内容⑤【 校内研修の充実 】 ICT機器を取り入れた授業づくりに取り組むとともに、国語科の授業を充実させるための研修会を行うようにする。 (カリキュラム改革関連) (マネジメント改革関連)	B
指標 ○ ICT機器を活用した授業を各学年1回以上行う。 ○ 国語科の授業づくりに関する研修会を1回以上行う。	

年度目標の進捗状況や経過達成状況の結果と分析
取組内容①【 習熟度別少人数授業の充実 】 ○ 3年生以上の国語・算数で、年間計画に基づいて習熟度別少人数学習を行うことができています。 個の学力に応じた指導を行ってきたので、児童の理解も高まり、学力の二極化の幅も狭まってきている。 ○ 「習熟度別少人数授業など個に応じた指導の充実にかかる事業」状況調査（後期分）における児童の学力・学習状況は、次の通りである。 ・ 単元テストで正答率が50%を下回る低学力層は、各学年5～10%で、年度初めと大きく変わっていない。ただ、分布の広がりは少なくなっているので、二極化傾向の改善は図られている。 ・ 漢字・計算等の平均正答率は、85～95%で、年度初めより5ポイント向上している。 ・ 「子どもの学習意識等」の調査項目で「分かる」と回答した児童の割合は、国語で2学年、算数でも2学年で前期を上回った。とくに、初めて習熟度別少人数授業を年間通して実施した3年生は国語・算数ともに良好であった。 ○ 学校生活アンケートによる児童の意識調査では、国語・算数の授業が「分かる」「だいたい分かる」と答えた児童は、前期（10月）と後期（2月）を比べると、国語92.2%→94.5%、算数93.3%→92.2%で、国語は増えたが算数は減る結果となった。 取組内容②【 言語力や論理的思考力の育成 】 ○ 資料を読み比べ、活用したり、文章を読み比べて意見を述べたり書いたりする授業（取り組み）を各学期1回以上行うことができた。 ○ 物語文の読み取り部分の正答率50%未満の児童の割合は、12クラス中、8クラスで前期と同じまたは前期より減らすことができた。 ○ ワークシートやノートに、学習のめあてをとらえた意見を書ける児童は多く、半数以上になっている。理由づけをして意見を書くことができる児童はほぼ半数位いる。一方で、発展的な、記述を多く必要とするような問題において苦手意識を持つ児童がいるので取り組みを続けている。

取組内容③【 特別支援教育の充実 】

個別の指導計画を作成し、年2回（9月末と2月末）、児童の達成状況に応じて、計画の見直しをした。作成した個別の指導計画をもとに、日々の支援に役立てることができた。

取組内容④【 授業研究を伴う校内研修の充実 】

全学年による研究授業や全員授業も計画的に実施できている。本年度は、28回の実施で、年間19回以上という目標は達成できている。研究授業を実施する場合に、視点に沿いながらも学年独自の工夫も見られた。また、研究授業の後は、講師先生を招いての討議会を開くことにより、教員全体の研修がさらに深まり、指導力の向上につながっている。

取組内容⑤【 校内研修の充実 】

- ICT フロンティアを中心にして、ICT 機器の使い方について知ることができた。また、ICT 機器を活用した授業も各学年 1 回以上行うことができ、特に、高学年はプロジェクターが教室についたので、デジタル教科書を活用した授業をより行いやすくなった。
- 国語科の授業づくりに関する研修会も夏に行うことができ、活用的な読みにつながる読解など指導法についても学ぶことができた。

来年度への改善点

- ① 教材に応じた指導形態を工夫していくようにする。
- ② すすんで理由づけができるような手立てを講じる。また、発展的な、記述を多く必要とするような問題においては苦手意識を持つ児童が少しでも苦手意識を克服できるよう、さらなる取り組みを続けていく。
- ③ 特別支援教育に関して、多様な対応を必要とする児童が多い中、学力の指導に十分手が回っているとはいえない状況である。担当者の配置や時間割を工夫して、抽出授業と入り込み支援が同時にできる時間を少しでも増やせるよう、学校全体で検討していく必要がある。
- ④ 全員授業については、時期が重ならないように、計画的に行うことができるようにする。また、参観者が増えるような工夫も図るようにする。
- ⑤ ICT 機器を活用した授業がさらに行えるように、環境を整備する。また、教育課程における年間指導計画を立てることで、共通理解を図るようにする。